

# イベリア 魂のフラメンコ

2006(平成18)年4月14日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督・脚本・美術＝カルロス・サウラ／舞踊家＝サラ・バラス／アントニオ・カナレス／アイーダ・ゴメス／ミゲル・アンヘル・ベルナ／パトリック・デ・バナ／マルタ・カラスコ／ギタリスト＝マノロ・サンルーカル／ヘラルド・ヌニェス／歌手＝エンリケ・モレンテ／エストレージャ・モレンテ／ピアニスト＝ロサ・トーレス＝パルド／チャノ・ドミンゲス／サクソ奏者＝ホルヘ・パルド（コムストック オーガニゼーション配給／2005年スペイン映画／95分）

……これは新聞評によれば、「音楽と舞踊の融合」した「ドキュメンタリー映画」とのこと。そしてスクリーン上で「演じられる」ピアノ組曲『イベリア』をベースにした全18曲の「芸術性」は、たしかに素晴らしいもの。しかし、私が予測しなかったのは、そこに物語性が全くないこと。「語るべきストーリーは音楽に内包されている」と監督は語っているらしいが、いくら芸術性が高くても、理解力の低い私は、ジッと観ていてしんどかったというのが本音……。しかも登場する「芸術家」たちは、おじさん、おばさんばかりだから、視覚的にも……。そんな俺ってヘン……。さて、あなたは……？

## カルロス・サウラ監督とは？

私は全然知らなかったが、この「映画」を監督し、脚本・美術も担当したカルロス・サウラ監督は、40年以上にわたるキャリアの中で、『カルメン』（83年）、『恋は魔術師』（85年）、『タンゴ』（98年）、『サロメ』（02年）など数々の傑作を世に送り出したスペイン映画界の巨匠とのこと。

## ピアノ組曲『イベリア』誕生100周年

また、これも私は全然知らなかったが、この映画の中で「上演」される全18曲は、スペインが誇る作曲家、イサーク・アルベニスがかつて100年前に

着手したピアノ組曲『イベリア』からカルロス・サウラ監督が本作のイメージを得たとのこと。

### 新聞評は……？

2006年4月14日付日本経済新聞（夕刊）に掲載されたエッセイスト、武部好伸氏のこの映画についての新聞評によれば、①音楽と舞踊の融合——。その優美に絡み合った深奥なる世界に、カメラがしなやかに迫っていく、②スペイン映画界の巨匠、カルロス・サウラ監督が渾身の力を込めて撮ったこのドキュメンタリー映画は、異次元に足を踏み入れたかのような錯覚に陥らせるとあり、結論として、「光と影の饗宴。その刺激的な空間にぼくは陶醉した」と書いている。

他にも観たい映画がたくさんあった私は、「この映画は時間があれば……」程度に考えていたのだが、この新聞評を見て、やはり観ておかなければと決心した次第。しかして、私の満足度は……？

### 芸術性は……？

全18曲で登場するのは、冒頭に紹介したような「有名な」舞踊家、歌手、ギタリスト、ピアニストばかりだが、残念ながらこの方面に疎い私は、これも全然知らない人たちばかり。スクリーンを観ていれば、ダンスをはじめとするこれらの「芸術家」たちがくり広げる「芸」の芸術性は、理解できる（つもり）……。しかし、映画は芸術性が高ければいい、ってものではないのでは……？

### 映画全体の物語性は……？

じっと観ていて何よりもしんどかったのは、映画全体を通じた物語性が全くないこと。つまり、これは1曲ずつタイトル名が示されて、順次「芸術家」たちの芸がスクリーン上で上演されていくだけの「映画」なのだ……。パンフレットによれば、カルロス・サウラ監督は「語るべきストーリーは音楽に内包されている」と考えているらしいが、それってちょっと独りよがりでは……？ それとも私が武部好伸氏ほどこの映画に陶醉することができなかつたのは、ひとえに私の芸術への理解力が低いせい……？

## 登場人物たちは……？

全18曲に登場する「芸術家」たちは、それぞれその道でのそうそうたる人たちがばかりだが、その芸術性の高さと、そこに魅力を感じるかどうかは、また別の話。スリムで鍛え上げられた舞踊家たちの肉体を見れば、男でも女でもそこに魅力を感じるのは当然。また、スペイン人は彫りの深い顔立ちの人が多いため、のっぺらぼうな顔立ちの日本人に比べれば、おおむね魅力的に見えることも、ある意味当然。しかし、ちょっと太めのスペイン人のおじさんたちは別……？ さらに、年を取ったスペイン人のおばさんたちは、いくら芸術性が高くても、少なくとも私にとってはあまり魅力的とは言えない……？ やはり何人かは、すごい美人「アーティスト」も登場させてくれなくては……？ こんなことを考えながら、こんな芸術映画を観ている俺って少しヘン……？

2006(平成18)年4月15日記

ミニコラム

### 『プリマダム』にみるバレエ論

中森明菜の「プツンぶり」は昔から有名だが、そんな明菜と今をときめく女優黒木瞳を対極に置き、バレエをテーマとした今春の人気ドラマが『プリマダム』だった。

2人は子供の頃同じバレエ教室に通っていた幼なじみ。しかし、今や黒木は平凡な主婦だが、ロイヤルバレエ団のプリマという華麗な経歴を誇る明菜は、息子をロイヤルバレエ団に入れるべく特訓中。そんな女同士の友情と家族愛のドラマだったが、その論点は真

の芸術とは何かということ。

プロのバレエに高度の芸術性が要求されるのは当然だが、それ以上にバレエは人の心を打つものでなければダメ。明菜が息子に伝授しようとしたのは、その高度な芸術性。他方、授業料を払えない黒木が掃除や雑用でバイトをしながら通う下町のバレエ教室には人の心を打つバレエがあった。そんな視点から考えると、『イベリア 魂のフラメンコ』の芸術性は……？

2006(平成18)年8月16日記